

知っておきたい自転車最新ニュース速報!!

「これだけ読めば話題は先取り!?!」

HEAD LINE

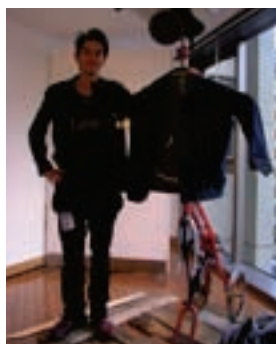
CITY

トロント発!! 夢の自転車空間 全天候型 スーパーチューブ



2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪会場(インテックス大阪)11月11日~12日での開催予定だ

浅田顕氏と、本誌連載でもお馴染みのトリアスリート白戸太郎氏が新チームを設立する。選手、スポンサーなど詳細は未定だがツール・ド・フランス出場を目的に掲



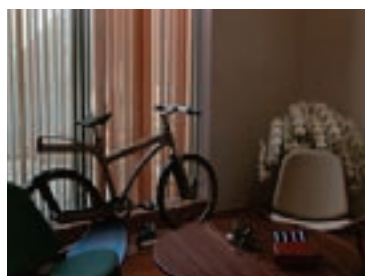
自転車ファンの投票で、今年活躍した選手に賞を贈る企画「ライダー オブ ザ イヤー」の投票を開始。投票しめきりは2月20日。(詳細はP130へ) 自転車ファ

2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪会場(インテックス大阪)11月11日~12日での開催予定だ2006年は

CITY

自転車にちなんだ 大人の空間が 東京・青山に オープン

自転車ファンの投票で、今年活躍した選手に賞を贈る企画「ライダー オブ ザ イヤー」の投票を開始。投票しめきり



2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪会場(インテックス大阪)11月11日~12日での開催予定だ2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、

ART

廃棄自転車を カスタムして 作ったアートが誕生!!

廃棄自転車を
カスタムして
作ったアートが誕生!!

GOODS

コラボレンクルなど ホームページで申し込み開始!!

自転車ファンの投票で、今年活躍した選手に賞を贈る企画「ライダー オブ ザ イヤー」の投票を開始。投票しめきりは2月20日。(詳細

2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪会場(インテックス大阪)11月11日~12日での開催予定だ2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪



ROAD

今年も 日本人選手が活躍!! ツール・ド・ランカウイ



2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪会場(インテックス大阪)11月11日~12日での開催予定だ2006年は■東京会場(幕張メッセ)11月4日~5日、■大阪会場(インテックス大阪)11月11日

東京会場は幕張メッセ会場、大阪会場は南港インテックスで開催された。一部では試乗車に1時間以上待ちができるほどの賑わいだった。(詳細P107) 東京会場は幕張メッセ会場、大



「ロードバイクカタログ 2006」
「自転車生活 VOL.3」が発売!!

1000台以上の最新マウンテンバイクの情報を満載した「MTBオールカタログ2006」(12月17日発売)。さらに今中大介氏が最新ロードバイクを一気にインプレ、その内容を掲載した「ロードバイクインプレッション2006」(12月26日発売)が登場



自転車ツーキニスト
疋田智の
「現場から生中継」

Vol. 48

「自転車走行チューブは果たして妄想だろうか」

ILLUSTRATION: Seisuke OOKAWA

ひきたさとし

都内某テレビ局勤務。「自転車活用推進研究会」委員にして往復24kmの自転車ツーキニスト。著書は「日本史の旅は、自転車に限る!」他、最新刊「天下を獲り損ねた男たち」,「大人の自転車ライフ」など。http://japgun.hoops.jp

ザ・チューブ

驚くべきものをネットの中で発見した。これはもう画像を見ていただろしかなないがカナダのトロントで行われている「Velo City」と呼ばれるプロジェクトで、透明なチューブの中を、何台もの自転車が走っている。その様子はまるで未来都市だ。まずは当該の記事「Budget Japanese」<http://japanese.angadgets.com/>から引用してみよう。

渋滞や大気汚染といった問題あるいは市民の健康のために自転車道を都市計画に積極的に取り入れ専用道路を造るという試みは広くおこなわれているものの、トロントのような土地で障害となるのは冬の寒さ。気温はもろもろ積雪や路面の凍結で自動車よりも死ねる乗物になります。

この問題を解決すべく提案されているのがVelo City。プラスチックでチューブ状に覆われ連結されているために効率的な暖房ができ、自動車用的高架道路を建設するより圧倒的に低コストで済むという。

なるほど、「寒い」というトロントの気候条件から、こうしたプラスチックのチューブを作ることを考え出したのね。それにしても、いいなと思うのは、こうしたプロジェクトの前提として「自転車を都市計画に積極的に取り入れ専用道路を造る」ということが、もう当たり前前のごとく認識されていることだ。「これが日本になるべき」まずはその部分からコンセンサスを得ることが必要だもの。あのカナダもやはりそうなりつつあるのだ。もはや自転車に対する認識が激ハカに遅れているのは、先進国では日本だけになってしまったよ。

さて、そのチューブ、実は防寒という以外に、意外な副産物を生んだ。引用を続けよう。面白いのは、車線ごとに一方通行の独立したチューブになること。事故のリスクを減らすのは当然ですがチューブであることを活かして空気の流れるも一方通行にできるため常に追い風を吹かせて自転車の運動効率を90%も向上させられるそうです。自転車最大の敵が空気抵抗であることは良く知られていますがVelo Cityのチューブ内では普通に漕ぐだけで楽に時速40km程度がたせるとのこと。イメージ画像では思いきりすれ違っています。まあまあイメージというところ。

普通にペダルを踏むだけで、時速40kmがなる

ほてねえ。だが、コレはちょっとすごいことなのではないか？

確かに理論上、そして現実においても、そんなることと思う。追い風がものすごく楽で快適なのは、自転車乗り誰しも経験があると思う。確かに風こそは自転車最大の敵のひとつだが、最大の敵ということば、いったん味方につければ、これほど頼もしいものはないということだ。

おまけにこのチューブは「高架」として建設されるものだから、いったん使用者がチューブに上つてしまえば、あとは坂なし、ということでの設計できる。非常に自転車にとって優しいものとなることになる。これはいいなあ。

空中を走るチューブ状の交通機関というイメージは古典的ですがガソリンでも発電所から来る電気でも水素でもなく人力でというところがしつかり21世紀です。

記事のお言葉の通りである。

私の子供の頃、手塚治虫などが描いた未来都市には、確かに必ず上空に透明チューブが繋がっていた。中を走るのには「電動カー」だったろうか？それとも「エア・トラム」だったろうか。だが時代は変わった。21世紀は「地球環境の破壊」に始まり「温暖化」と共に鼻を閉じた。そこには直接間接を問わず、排気ガスを出すビークルはもはや似合わないのだ。

実現可能か、否か

と、まあね。

さて、ではこのプロジェクト、実現可能か否かと言われれば、多くの人は苦笑とともに「無理じゃない?」と言っている。まあそれが常識的な大人の判断ではある。イメージ的にも「フッぽくつまり大方の人にとって子供っぽくて、現実から遊離して、ように見える。

だが、ちょっとでも考えてみる余地はないだろうか。たとえばこのチューブを東京に通す、ということを考えてみるのだ。実は考えれば考えるほど、私はまんざら不可能ではないと思いはじめていく。

別段、トロント方式を踏襲する必要はない。東京はトロントほど寒くないから。

それよりむしろ、夏の暑さの方が問題だ。だからトロント方式のように密閉するのはかえって不利だと思え、もちろん強制空調の必要はない。それよりもチューブの横には窓をいくつもあけるべきだ。

きだろ。場合によっては路面と屋根と柱だけでいいのだ。そう、日本でもこれをやる意味は「寒さ対策」なんかよりも、何より「雨対策」であるからだ。

試しにこのチューブを上り下りの2本、東京主要道路の中央分離帯上空に設けてみる、というのはいかがだろうか。

あくまで東京を例とするならば、敷設するべきは、外堀通り、明治通り、山手通り、環七、環八の主要環状線と、第一京浜、桜田通り、246号線、甲州街道、目黒通り、昭和通り、水戸街道14号線の主要放射線だ。手始めとしてはもっと少なくてもいいかもしれない。

これができる、前々から私が申し上げていることこの「自転車首都高」が完成する。そして、これまた前々から申し上げていること、都内移動に関しては、この「自転車首都高」こそが間違いない。最速になるはずだ。当然、電車よりもクルマよりも速い。

愉快なのは、たとえば環七の上空にこれができる、地上はご承知の通り渋滞渋滞のタマラン状況だ。ところが地上を見上げると、透明なチューブの中を自転車がすいすい走っていく。マチャリだつてクルマよりも格段に速い。ドライバの一部、ないしは大部分が「あ、いいな。明日は俺も自転車に乗るかな」と思うであろう。自転車のイメージが大いに変わるだろう。自転車チューブは、自転車のポテンシャルを見せつけるためのディスプレイ装置でもあるわけだ。ついでに言つてチューブの中は「高速車」「スポーツ自転車」と「低速車」「ママチャリ」でレーンを分ける必要があるだろう。

環境にも格段に優しい。健康にもいい。最もスピーディゆえにビジネス効率も上がる。クルマの首都高に較べるとはるかにコストもかからず、省スペース、唯一の弱点と思われた「雨」についても、これでは大丈夫だ。

何なんだこれは。「出来るかどうか」というよりも、今すぐに「やるべき」ではないが、躊躇するにはあまりに結果が良さすぎる。

何? そのカネがない? そんなバカなことはない。

空調を備えたトロント方式だつて、自動車用の高架道路を建設するより圧倒的に低コストで済むこと、このことから、空調なしの「東京方式」は、もっと低コストで済むであろう。そこに道路

予算の一部をぶち込む、と。道路予算は、以前短期集中連載「道路は誰のものですか」でも書いたとおり、毎年10兆円以上もあるのだ。そのほんの一部、ほんの一部を使っただけで、この夢のようなプロジェクトは実現できるのである。

思えば戦後60年、日本人たちは夢とも思えるような奇跡を起こしてきたではないか。東京を歩く人の目の前にある、あらゆるタワー、地下鉄線、高速道路、光ファイバーネット、などなど、みな50年前には夢か幻かと言われたものばかりだ。全部現実となった。

自転車走行チューブなど、これらの色々なものに較べれば、何ともない。

六本木ヒルズも、東京ミッドタウンもいいが、誰かこういうもので我々の目の前に「真の未来」を示していただきたいものだ。

Velo-City www.velo-city.ca/はChris Hardwick氏のアイデアだ。問い合わせると、この他にも、上り下りの2本のチューブを並べた絵柄やより現実的な画像がやっていた

